第二場面　七組のまとめ

「僕」は、家族や友達や親戚の人たちがそんなに、なんとしてもやめさせなければ、と思ったほどで、気づいていたのにやめられず、ちょう集めに熱情を持っていた。　浅井健太朗

「僕」は激しい欲望や緊張・歓喜に毎日襲われ、みんなが何度もやめさせたいと考えたほど、ちょう集めに熱情を持っていた。　川瀬李加

「僕」は、みんなに、「やめさせなければならない」と考えさせるほど、ちょうのとりこになり、ちょう集めに熱情を持っていた。　植木伯臣

「僕」は、あまりの激しい欲望に駆られ、三度の飯よりもちょうが好きで、朝から晩までちょう集めに熱情を持っていた。　鈴木大輝

「僕」は、次第にちょうを取る激しい欲望、緊張、歓喜にさらされて、いつの間にかちょう集めに熱情を持っていた。　坪井美澄

「僕」は、他のことはすべて忘れてちょう集めをしていた。まるで宝を探す人のようにちょうを宝にたとえるほど、ちょう集めに熱情を持っていた。　長野修平

「僕」は、子どもだけが感じることができる、あのなんともいえない、むさぼるようなうっとりとした感じにくぎ付けになり、ちょう集めに熱情を持っていた。　伊藤礼弥

「僕」はだんだんちょう集めに夢中になり、それは周りの人が止めようとしたほどだった。けれど、「僕」はちょう集めを一日中やるほど、ちょう集めに熱情を持っていた。　岩田　悠

「僕」は、ただ何となく始めただけだったのに、いつの間にかすっかりとりこになってしまった。そして、周りの人からも止められるほど、ちょう集めに熱情を持っていた。　柴田珠里

「僕」は、ちょうを見るたび、むさぼるようなうっとりとした感情に駆られ、たくさん集めることによって満足感を味わっていた。そのため、一日中外出して、人に心配されるほど、ちょう集めに熱情を持っていた。　内木希美

「僕」は、最初はつきあい程度に始めたちょう集めをすることで、むさぼるような感覚に襲われ、ちょうのとりことなった。日常生活をすべてすっぽかし、ちょう集めをする「僕」を見て、周囲の人は何度もやめさせようとしたが、実現できなかった。そして「僕」は、とらえる喜びに息も詰まりそうになりながら、ちょうの細かいところも見ることができ、みんなから異常と見られるほど、ちょう集めに熱情を持っていた。　大久保咲良